

# いわくらじ 岩崎寺の石造物

岩崎寺は常願寺川扇状地の扇頂部右岸の段丘上にあり、承久2年（1220）の建立になるという社殿を有し立山権現を祀る立山寺を中心とした宗教村落です。江戸時代には門前に24の宿坊を有した宿坊村落でもありました。また、立山別当として、山地の経営を任せられました。

## 立山寺 [たてやまでら]

現在の雄山神社前立社壇の位置にあった寺院。立山山頂にある峰本社の里宮として創建され、中世まで立山寺または大宮立山寺、江戸時代は立山別当岩崎寺（岩倉寺）とも称されました。

**玉泉院狛犬** 阿吽とも同形同大の緑色凝灰岩製で、拝殿に2基一対が安置されています。

加賀藩二代藩主前田利長夫人の永姫が未亡人となってから寄進したものと伝えられ、加賀藩と立山との親密な関係を示す貴重なものです。

**一石一字経塚** 岩崎寺衆徒の一人、常住坊秀尊によって享保16年（1731）に建立された経塚です。一石一字経とは法華経の経文を小石に一字ずつ写し納めたもので、上部に立つ五輪塔には、没する二ヶ月前に写経を終え大願成就したことが記されています。

現在は雄山神社境内の南端近くの茂みに隠れるようにひっそりと立っています。



本殿（重要文化財）



玉泉院狛犬・吽形  
(町指定有形文化財)



**一石一字経塚** 岩崎寺衆徒の一人、常住坊秀尊によって享保16年（1731）に建立された経塚です。一石一字経とは法華経の経文を小石に一字ずつ写し納めたもので、上部に立つ五輪塔には、没する二ヶ月前に写経を終え大願成就したことが記されています。



一石一字経塚

## 文殊菩薩 [もんじゅぼさつ]

文殊菩薩は釋迦如来の脇侍で、立山大縁起では附法の系譜（仏法の系譜）の第一代に挙げられている立山信仰と関わりの深い仏です。



文殊菩薩坐像



地域に残る衆徒墓地

## 衆徒墓地 [しゅうとぼち]

岩崎寺の集落には、立山寺衆徒24坊の墓地が現在も残っています。墓地はかつての立山寺神地を取り囲むように点在しています。

墓地には千基近くの墓標が建っており、墓標に刻まれた最も古い年号は元和元年（1615）で、現代に至るまで墓地が営まれています。

中世の墓地については詳しく分かっていませんが、衆徒墓地には中世の五輪塔や板石塔婆などが残されています。

## 百体觀音 [ひゃくたいかんのん]

宮路仏事会館前の觀音堂に安置されています。西国三十三所・坂東三十三所・秩父三十四所の觀音札所に祀られている觀音を模して造られ、もとは立山寺境内北域の觀音堂に祀られていました。台石に彫られた銘によると、享和元年（1801）、衆徒の四僧が願主となって、広く施主を募り建てられたものです。明治の廢仏棄釈により立山開山旧跡の聖地であった現在地に移設されました。



百体觀音

## 導引地蔵 [みちびきじぞう]

高さ3m余りの巨大な延命地蔵です。衆徒坊家出身で富山清水町吉祥院の住職観龍が亡き両親の供養を思い立ったのが造立の発端でした。観龍の師であった上滝大川寺の大見和尚が、檀家総代であった宮路村茂左衛門に支援を依頼し、上滝村や宮路村の檀家仲間が世話人となり、馬瀬口村の名工中川甚右衛門を頭に4名の常願寺川石工によって天保14年（1843）に完成しました。開眼は富山光厳寺の住職が執り行い、立山寺境内に安置されていましたが、明治の廢仏棄釈によって宮路仏事会館に移され、さらに茂左衛門によって新たな立山往来となっていた現在地に移されました。現在も立山にゆく人々を見守っています。



導引地蔵

よって天保14年（1843）に完成しました。開眼は富山光嚴寺の住職が執り行い、立山寺境内に安置されていましたが、明治の廢仏棄釈によって宮路仏事会館に移され、さらに茂左衛門によって新たな立山往来となっていた現在地に移されました。現在も立山にゆく人々を見守っています。

## 弥勒塚 [みろくづか]

立山禪定道を秋ヶ嶋用水を過ぎて程なくの所にこんもりとした塚があります。塚の頂部には台座に「南無弥勒大菩薩／享保十六辛亥七月吉日／願主／金剛佛子阿闍梨秀□造建之」と刻銘した弥勒菩薩像が座しています。塚の手前には、「為先亡後滅／享保十六亥天七月吉祥日」と刻銘された無縫塔があります。この塔は塚造立の趣意塔とみられ、亡くなった人々の供養と生きている人々の増益息災を祈願して造営したことが記されています。この塚には明妃（みょうひ）と呼ばれる珍しい女形の石像が四体あり、弥勒曼荼羅などの仏教的世界観を表すものであったようです。弥勒塚の地は岩崎寺の聖地でしたが、のちに無縁仏を埋葬する地となりました。塚にある阿弥陀如来像や地蔵菩薩像、無縁仏の塔碑などは廢仏棄釈によって立山寺から移されたものと考えられています。



弥勒塚

弥勒菩薩坐像

# あしきらじ 芦嶺寺の石造物

芦嶺寺は常願寺川中流域右岸の河岸段丘上にあり、立山を開山した慈興上人が眠る開山廟を有する中宮寺を中心とした宗教村落です。江戸時代には門前に 33 の宿坊を有した宿坊村落もありました。芦嶺寺の衆徒は立山信仰の全国的な布教活動を行い、布橋灌頂会といった独自の宗教行事を行っていました。



雄山神社中宮祈願殿

## 中宮寺・閻魔堂 [ちゅうぐうじ・えんまどう]

中宮寺は婬堂・閻魔堂・帝釈堂・鐘樓堂・仁王門・布橋・講堂・立山開山堂・大宮奥院・若宮などを有した寺院でした。立山地獄の信仰から、中宮寺の中心ははじめは閻魔堂でした。女人禁制のなかでの女人の参詣が増え、婬堂へと移っていきました。そして、女人救済の布橋灌頂会に代表される独自の宗教世界を作りました。

現在も残る閻魔堂には、木造閻魔王像のほか、かつて婬堂にあった婬尊など当時の宗教的世界觀を偲ばせる仏像が安置されています（富山县指定有形民俗文化財「芦嶺閻魔堂の仏像群」）。閻魔堂の周辺および布橋に至る明念坂には、多くの石造物が立ち並んでいます。これらの中には、遠く氷見で産出される微粒砂岩（敷田石）を用いた中世の地蔵菩薩像や、立山周辺で最も古い天正 14 年（1586）の銘を刻む一石五輪塔など貴重な石造物があります。



閻魔堂周辺の石仏

される微粒砂岩（敷田石）を用いた中世の地蔵菩薩像や、立山周辺で最も古い天正 14 年（1586）の銘を刻む一石五輪塔など貴重な石造物があります。



敷田石製の地蔵



## 庚申塚の石仏群 [こうしんづかのかせきぶつぐん]

死出の山を登り現在の小学校に出ると、杉の古木が立つ高塚状の土盛りがあり、中央に宝永 3 年（1706）の銘を刻む青面金剛立像があります。青面金剛は江戸時代に庶民のあいだに広まった庚申信仰の本尊とされ、立山周辺では立山町末三賀の元禄 13 年（1700）の石像に次いで古いものです。また、塚上には六地蔵をはじめ旧立山道の石仏が集められています。尾張の俳人晩翠の句碑「白いみち来よと／志きりに呼子鳥」は布橋大灌頂会の情景を詠んだものと言われています。



庚申塚の石仏群



## 「三途の川」道標 [さんずのかわどうひょう]

千垣駅から旧道を辿ると三途の川（庚申谷川）があり、ここを渡った崖縁に大きな川石の道標がありました。  
「此所／三づ川／是ゑ／しでの山」と刻まれたこの道標は、全国でも珍しい三途の川と死出の山への冥途案内の道標で、地獄で知られた立山ならではのものです。立山曼荼羅にも描かれました。



「三途の川」道標 \*1

## 六地蔵 [ろくじぞう]

六地蔵は六道地蔵とも呼ばれ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道それぞれにあって導くとされます。布橋を渡ると左手に幅 2m 余り、高さ 1.3m の凝灰岩の一枚岩があり、この一面を削り出し、高さ 76 cm の地蔵立像六躯が半肉彫されています。粗雑ながらも力強い造りが特色の江戸時代前期のものです。芦嶺寺には他に貞享 2 年（1685）銘を刻む明念坂の六地蔵と、庚申塚の六地蔵があります。



布橋の六地蔵磨崖仏



明念坂の六地蔵



庚申塚の六地蔵

## 衆徒墓地 [しゅうとうぼち]

芦嶺寺衆徒は一山と呼ばれる自治組織を持ちました。江戸時代には 33 坊 5 社人の衆徒を中心として、宗教活動だけでなく日常生活も一体的に運営していました。

集落の墓地には、芦嶺寺衆徒の墓標が残っており、閻魔堂周辺も含めて 800 基余りの石造物があります。刻まれた年号は古いもので天正 14 年（1586）まで遡ります。明念坂にある慶長 5 年（1600）の銘を刻む板石塔婆は、墓標への移行期の形をもつもので、江戸時代の墓標の原形の一つと考えられています。閻魔堂や婬堂近辺の墓地は江戸時代の「立山曼荼羅」にも描かれていますが、中世の石造物が数少なく、江戸時代以前の詳細はよく分かっていません。



慶長五年銘板石塔婆

# 山上の石造物

立山の山上に広がる特異な景観は、人々に様々な宗教的世界を想起させました。立山地獄に代表される数々の言い伝えが生み出されました。

## 立山地獄 [たてやまじごく]

立山信仰の特色は、山中にある地獄の存在でした。死者の靈は山奥に行くと考える山中他界觀と仏教における地獄思想とが結びつき、立山には生きながらにして行くことが出来る地獄があると信じられ恐れられてきました。現在の地獄谷に、剣岳、みくりが池、血の池、賽の河原などの景観が地獄に見立てられました。

地獄谷の西にある伽羅陀山は、かつて山頂に小さな地蔵堂がありました。現在はコンクリートの保存堂があり、中には鎌倉時代や室町時代に遡る宝篋印塔、南北朝時代の地蔵菩薩・天部などの石造物があります。このうち、古い石造物ほど越中国外の石材で造られており、立山での石造物文化の初期には遠隔地からの導入が多かったことを示しています。



伽羅陀山山頂の保存堂 \*2



地獄谷



血の池

## 室堂平 [むろどうだいら]

日本最古の山小屋「立山室堂」(重要文化財)の南にある保存堂には、緑色凝灰岩製の十六羅漢や十王、微粒砂岩製の地蔵菩薩などが納められています。

付近には関西形式の特徴を示す宝篋印塔、奥州(宮城県)と関わりのある梵字を刻んだ石標、京都の住人の寄進した石燈籠などの石造物があり、立山信仰の深さや広がりがうかがえます。



保存堂内の石仏



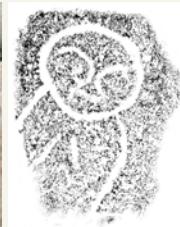
「立山室堂」付近の石造物

## 天狗平山莊の石仏 [てんぐたいらさんそうのせきぶつ]

平成元年の山莊改築の際に、旧山莊のあった付近で発見された室町時代に遡ると推定される石仏です。周辺と同質の凝灰岩に刻まれており、現地で製作されたと考えられます。現在は山莊の石垣に安置され大切に祀られています。



石垣に安置された石仏



石仏拓影

## 玉殿窟 [たまだのくつ]

立山開山縁起の聖地として知られる洞窟です。隣の虚空藏窟と共に、阿弥陀、地蔵、羅漢などの石像があります。



玉殿窟

## 賽の河原 [さいのかわら]

雷鳥沢と淨土沢の出会い一帯で、親より先に死んだ子どもが落ちるとされた場所で、六地蔵の石仏が安置されています。『立山西院川原地蔵和讚』に詠まれた情景が呼び起こされます。



賽の河原の六地蔵 \*2



## 三山巡り [さんざんめぐり]

立山へは、まず淨土山へ登り、ついで本峰を極め、さらに別山まで足をのばす「三山かけ」が本格的な登拝路とされました。これのほかに室堂から祓堂を経て一ノ越に至る道もありました。

現在も二ノ越・三ノ越などには小石仏を安置した小さな木堂が残されており、今も頂上を目指す人々を見守っています。



五ノ越



四ノ越



三ノ越